様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 年度～2011 年度
課題番号：21520324
研究課題名（和文）保守革命の教養理念――「探求者」の精神史的系譜を求めて

研究課題名（英文）The *Bildungsidee* of Conservative Revolution

研究代表者
大川　勇（OOKAWA　ISAMU）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：10194086

研究成果の概要（和文）：保守革命の思想家たちの世界観は、ゲーテ以降の伝統的なドイツ教養理念に深く根ざしている。シュペングラーは「無限」への意志、「超越」への意志を西洋文化の特質と見なし、それを「ファウスト的」と呼ぶことによって、ゲーテの「ファウスト」とニーチェの「探求者」を結び合わせた。エルンスト・ユンガーの理想とした「戦士」にも、フマニテートの血が流れている。トーマス・マンもまたドイツ的市民性の根底に、カントに遡る「倫理」を見出した。

研究成果の概要（英文）：The *Weltanschauung* of the thinkers of Conservative Revolution is deep-rooted in the traditional *Bildungsidee* after Goethe. By regarding the *Wille zur Unendlichkeit* and the *Wille zur Transzendenz* as the characteristics of Western culture and calling them “faustisch”, Spengler combined Goethe’s “Faust” with Nietzsche’s “Suchender”. In Ernst Jünger’s “Krieger”-ideal the blood of the *Humanität* also runs. In addition, Thomas Mann found out the *Ethik*, which goes back to Kant, in the essence of German *Bürgerlichkeit*.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009 年度 | 1,400,000 | 420,000 | 1,820,000 |
| 2010 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2011 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：独文学

## １．研究開始当初の背景

本研究の背景にあるのは、2005-2006 年度に科学研究費補助金（基盤研究 C）の交付を受けた研究「中欧における教養の精神史――フンボルトからスローターダイクまで」である。19 世紀初頭に産み落とされたフンボルト理念が、中欧における以後 200 年の受容史のなかでいかに変容したかを追跡するこの研究の過程で、私はとりわけニーチェとホーフマンスタールを結ぶ精神史的連関に興味を惹かれた。その苛烈な「教養俗物」批判のゆえに反教養主義者と見なされることの多いニーチェは、じつは「真正のドイツ的教養」を求める筋金入りの教養主義者であり、『反

時代的考察』第一篇における「教養俗物」批判もまた、フンボルトやゲーテの考えた「永遠の探求」としての教養を忘れ、装飾としての教養に自足している同時代の教養市民層に対する痛烈な批判であった。この書でニーチェは「教養俗物」の対極に位置する人間を「探求者」と呼び、永遠の探求に従事する「探求者」こそが本当の「教養人」なのだと言っているが、この「探求者」概念は半世紀の時を隔ててホーフマンスタールによって呼び出され、新たな意味を付与される。1927 年にミュンヘン大学で行われた講演『国民の精神空間としての文書』において、ホーフマンスタールは、自由よりも拘束を求める「探求者」にドイツにおける「真の国民」形成の核となる使命を与え、現在進行中の保守革命とは、このニーチェ的「探求者」が中心となって「精神的なもの」と「政治的なもの」が統一される地平へとドイツ国民を導いていく過程に他ならない、と言ったのである。それが政治的含意をもって「保守革命」という言葉が発された最初の事例であったため、政治思想史の領域でこれまでホーフマンスタールは保守革命の提唱者のごとき位置づけを与えられてきた。しかし講演の内実は、「国民の精神空間」を論じるきわめて高踏的なものであり、政治的綱領というよりもむしろ、ドイツ的教養理念への信仰告白というべきものである。クルツィウスはこの講演を「ドイツの教養理念の最後の記念すべき出来事」と呼んだが、ホーフマンスタールの「保守革命」とは、まさに教養理念としての保守革命だったと言ってよい。

２．研究の目的

本研究は、ヴァイマル共和国期のドイツに隆盛を見た保守革命思想の根底に潜む教養理念を析出し、それをニーチェの「探求者」概念の系譜に連なるものと位置づけることによって、これまで専らナチズムやフェルキッシュ運動との関連でしか考察されてこなかった保守革命の思想を、19 世紀初頭のフンボルト理念に淵源するドイツ教養理念の精神史という大きな流れの中で捉え直すことを第一の目的とする。そのうえで、保守革命思想家たちの教養理念をトーマス・マンをはじめとする同時代の作家、思想家、およびナチスのイデオローグたちの教養理念と比較考察することによって、彼らの多くがなぜ一時的にではあれナチズムに引きよせられ、しかしその後ナチズムから離れていったのかを、その教養理念の特質から解明することを第二の目的とする。

３．研究の方法

本研究は、上述した二つの研究目的に対応して、以下の二つの研究段階に分かれる。第一段階では、保守革命思想家たちの主要著作を読み解き、その根底にある教養理念を析出することに最大の努力がはらわれる。個々の思想家の著作および周辺の日記、手紙等から析出された教養理念を分析して、そこに共通する教養理念の要素を抽出し、それをニーチェおよびホーフマンスタールの教養理念につなげることによって、保守革命思想の教養理念がニーチェ的ないしホーフマンスタール的「探求者」の系譜として統一的に把握できることを示す。さらには、この狭義の「探求者」の系譜を、「永遠の探究」というフンボルトに遡るドイツ教養理念の精神史的系譜（＝広義の「探求者」の系譜）のなかに位置づける。つづく第二段階では、第一段階で摘出された保守革命特有の教養理念を、同時代の他の作家、思想家の教養理念、およびナチスのイデオローグの教養をめぐる言説と比較する。保守革命に距離を置いた同時代の作家、思想家の教養理念との比較では、その教養理念の違いによるナチズムとの親和性の相違を明らかにし、ナチのイデオローグの教養をめぐる言説との比較では、その教養理念のナチズムとの親和性と背反性を明らかにして、保守革命思想家たちが陥った罠と、にもかかわらずナチズムを拒否しえた力の源泉について考察する。

４．研究成果

『西洋の没落』（1918／1922）でシュペングラーは、春・夏・秋・冬という季節の推移のアナロジーで世界史の諸文明の発展と没落を不可避の運命として説いたが、その歴史認識を支えていたのは、ヴァイマル共和国において顕在化する大衆社会への批判的眼差しであった。大衆社会における教養市民層の無力をニーチェの「末人」概念によって批判したシュペングラーは、「知能と貨幣」に基づく政治の現状を「文明」期の頽落現象と見なしつつ、不可避の没落を威厳をもって遂行するためのカエサル主義の到来を覚醒存在としての「ファウスト的人間」に求めたのである。エルンスト・ユンガーもまた、教養市民層の築いた社会的秩序の打破を求める。ヴァイマル期の大衆社会を唾棄するユンガーは、安楽を貪る大衆＝市民にニーチェ的な「高貴な人間」である「冒険者」＝「労働者」を対峙させるが、そのモデルとなったのは第一次大戦に赴いた「戦士」たちであった。鉄兜の下にのぞく戦士たちの真剣な顔は、「秘められたドイツ」とユンガーの呼ぶ根源的価値を体現しているが、それはけっして猛々しい情熱だけを意味しているのではない。『忘れえぬ人々』(1928) に収められた追悼文「カスパル・ルネ・グレゴリ」を読めば、ユンガーの理想とした「戦士」が、安楽さに汚染される前のフマニテートをもった人間である

ことがわかる。

シュペングラーについての考察を論文「シュペングラーにおける「ファウスト的」なるもの」にまとめる過程で判明したのは、いっけん奇矯な歴史哲学を語るかに見えるシュペングラーの『西洋の没落』が、ゲーテ以降の伝統的なドイツ教養理念に深く根ざした世界観を内包していることである。歴史上存在した八つの高度文化のうちの一つである西洋文化を「ファウスト的」と呼んだシュペングラーは、この命名によって西洋文化の本質を「無限」への意志、「超越」への意志をもつものと規定した。孤独と夜を好む「ファウスト的魂」は地上的なものに飽き足らず、無限の空間に分け入ろうとする。その情熱を体現するのがゴシック建築であり、フーガの技法であり、「内面の発展」をえがく教養小説である。これら、いずれもドイツ的と言い換えることの可能な文化の形態は、それが「意志の文化」であると言われることによってニーチェと結びつく。「意志」と「理性」のどちらが優先するか、という西洋哲学史の重要問題のひとつを取り上げたシュペングラーは、「意志」を優先するのが「ファウスト的」人間であり、とりわけニーチェがそうであったと言う。「ファウスト的」世界像の純粋空間は感覚的な「アポロン的」空間を克服した「力への意志」としての拡がりであると言うことによって、さらには「ツァラトゥストラ」における「向こう岸への憧れ」を称揚することによって、シュペングラーはゲーテの「ファウスト」とニーチェの「探求者」を結び合わせるのである。

最終年度においては、ナチスのイデオローグたちの教養をめぐる言説を検討し、保守革命思想の教養理念の同時代における独自性を明らかにする予定であったが、3.11 以後の状況に身を置きつつこの問題を考えていくうちに、思考はフクシマをめぐる日本の対応とドイツの対応との比較考察へと向かった。日本の政府とマスメディアが原発と放射能の安全宣伝に終始したのに対し、ドイツのマスメディアは事故直後からその危険性を大きく報道し、政府もまた直ちに連邦首相メルケルの主導で「倫理委員会」を立ち上げて、哲学者や社会学者を含む識者たちに原発存続の可否を諮った。その答申を受けてドイツは 2022 年までにすべての原発を廃止する決定を下したのであるが、そこに見られたのは技術的安全性とは異なる倫理的・文明論的次元で原発の存続を考えようとする姿勢であり、その背後にはカントやフンボルトに遡るドイツ教養理念の精神史的系譜の遺産が横たわっているのを見ることができる。学生および院生との討議を通して明らかになったのは、以下の三点に要約できるドイツ教養理念との関わりである。１）啓蒙の精神――カントに遡る、自分の頭（悟性）で考えることを重要視する精神。２）理想主義の精神――フンボルトに遡る、人間形成を最重要視する精神。３）ファウスト的精神――ゲーテに遡る、無限への意志を重んじる精神。以上の精神はいずれも、「専門家」の言説を無批判に受け入れ、経済的利益を優先し、徹底的に考えることを忌避して真実を糊塗しようとした日本の状況と鋭い対立をなすが、こうした精神は、わけてもファウスト的精神を称揚したシュペングラーを介して、同時代の保守革命思想と深く関わっている。

保守革命の思想家とは言えないが、トーマス・マンもまた、保守革命の時代を生きた重要な作家である。マンが「ロシア・アンソロジー」（1921）においてホーフマンスタールに先んじて「保守革命」という言葉を使ったことは知られているが、それが政治的保守革命に直接関わるものではなかったため、これまでマンと保守革命の関係にはあまり関心を払われてこなかった。しかしそれは「ニーチェ自身はじめから、『反時代的考察』においてすでに、保守革命以外の何ものでもなかった」という、本研究にとって無視できない発言であり、しかもイプセンの「第三の国」を語る文脈で発語されたものである。はたして、『非政治的人間の考察』（1918）で国粋主義的な文化保守主義者であることを宣言したマンは、ドイツ的市民性の根底に「倫理」を見出した。マンによれば、西欧「文明」対ドイツ「文化」の対立は「ブルジョア」対「市民」、「審美家」対「倫理家」の対立であり、ドイツ的教養に支えられた「市民」にとって、倫理的なものは美的なものよりも常に優位にある。この「生における倫理の優位」はカントにおける純粋理性に対する実践理性の優位に淵源するものであり、カント以降、ドイツ的生の形式には秩序、義務、平静、誠実といった倫理的特性が付与され、芸術家から職人にいたるまで、ドイツ的市民は「業績の倫理家」として己の仕事を禁欲的に営んできた――そう述べるマンは、近代ドイツ精神史の中にとりわけ深く刻印された倫理家として、ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェの名前を挙げ、そこに共通する「倫理的な空気」と「ファウスト的な匂い」を指摘することによって、シュペングラーと同じ精神史的位相に立つのである。

ドイツ的市民性の根底にカントに淵源する「倫理」を見るこの視点は、ナショナルな運動としてナチズムとも一定の価値観を共有しながら、しかし最終的にナチズムと袂を分かつことになる保守革命思想にも共有されていた。のみならず、原発の問題を定言命法的に議論した、メルケルの「倫理委員会」にも何らかの回路を通して共有されているだろう。現在執筆中の論文は、そうした現代

ドイツの倫理観にもつながるドイツ的教養理念の精神史的連関を解明することを課題とするものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
① 大川勇、シュペングラーにおける「ファウスト的」なるもの、ドイツ文学研究、査読無、56 号、2011、1-20
② 大川勇、北島玲子『終わりなき省察の行方――ローベルト・ムージルの小説』上智大学出版、オーストリア文学、査読有、27 号、2011、56-58
③ 大川勇、ドイツ的教養について、京都大学総合人間学部広報、査読無、47 号、2010、6-7
④ 大川勇、『西洋の没落』を読む、ラテルネ、査読無、103 号、2010、3-5

〔学会発表〕（計　件）

〔図書〕（計１件）
① 宍戸節太郎、須藤温子、黒田晴之、古屋晋一、北島玲子、大川勇、日本独文学会叢書、『群衆と権力』の射程――エリアス・カネッティ再読、2009、92（79-92）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/lang_german.html

６．研究組織

(1)研究代表者
大川　勇（OOKAWA ISAMU）
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授
研究者番号：10194086

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：